

小河滋次郎の初期保護思想に関する考察

－「社会公共」に注目して－

東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科 益田 幸辰 (4901)

キーワード：小河滋次郎、監獄改良事業、公共性

1. 研究目的

本研究は、小河滋次郎の『監獄学』の分析・検討を通して、彼の初期保護思想の特徴の一端である「社会公共」を考察し、当時の社会思想における小河の思想の位置づけを試みようとするのが目的である。

2. 研究の視点および方法

まず、小河が『監獄学』を「同僚以外博く社会官民の間に擴張せしめんこと實に著者の熱望して止まざる所なり」（小河 1894：例言 10）と述べているように、『監獄学』は、内務省の同僚だけではなく、広く社会に普及することを熱望していた。また室田保夫は「監獄改良事業が社会問題対策としての性格、あるいは人権問題としても問わなければならない課題も包摂していたのである」と述べている（室田 2011：2）。これらのことから、『監獄学』は、同僚への行刑制度の解説書に止まらず、「社会問題対策」の思想を帯びて「社会官民」に広がることを目指したのではないかと考えられる。本研究ではこの思想を小河の初期保護思想とみなし考えることにしたい。次に、小河の思想を分析・検討するための背景として、当時の社会思想である啓蒙思想・自由民権思想・社会有機体思想・初期社会主義思想が考えられるが、そのなかでも社会有機体思想と初期社会主義思想に注目した。その理由として自由民権思想は「国権主義の大波のなかにまきこまれ、消え去っていった」（山口・小山 1966：14）と評される状況に陥り、理論的支柱の一つとみなされたスペンサーの思想に対する解釈も自然法的な個人主義の倫理から社会有機体説へと論理が転換させられたからである（森田 1966：29）。社会有機体思想は、中央集権的な国家主義の台頭を背景として、自由民権思想に対抗し、人々に大きな影響力を持った思想であるが、その代表的思想家として、加藤弘之が挙げられる。それに対して初期社会主義の思想は、社会有機体思想とは対称的であり、社会の大きな変化にともない、貧困に陥った人々への対応を考えるなかで社会を変えることを志向した思想と言えよう。代表的思想家として安部磯雄が挙げられる。研究方法は、小河をはじめ同時代の思想家の主張を原典に基づいて分析・検討していくことにする。なお資料引用の際には、旧字・異体字・カナなどを適宜改めた。

3. 倫理的配慮

「研究倫理指針」に従い、他説を引用する際や引用において細心の注意を払った。

4. 研究結果

報告者は、小河の初期保護思想が、有機体思想・初期社会主義思想とどのような関係にあり、どのように位置づけられるのかを検討した。考察の結果、小河は有機体思想と初期

社会主義思想から影響を受けながら、独自の保護思想を打ち出していることが明らかになった。またその独自性を明確にするのが「社会公共」の思想であったことが判明した。

5. 考察

有機体思想の代表的思想家である加藤弘之は優勝劣敗・自然淘汰の法則をもとにして、優者を「上等平民」とし、「国家の元気」はこの種族にあると述べ（加藤 1883 : 55）、「無知蒙昧の衆民」が煽動されて「上等平民」を圧倒しようとしていると論じている（加藤 1883 : 54）。一方、初期社会主義思想の代表的思想家、安部磯雄は、「社会問題と慈善事業」において「貧富の懸隔」と「社会問題」に注目したが（安部 1895 : 3）、精神の救済を伴わない欧米の救貧院を批判し、社会組織を改めるべきだと述べている（安部 1895 : 4-6）。

『監獄学』における初期保護思想を整理すると、大きく次の4つの柱があったと考えられる。第1に、犯罪が増加する理由として「社会進化の定則」「生存競争」を挙げている点、第2に、「賢愚貧富の懸隔」と関連づけて、犯罪者は貧しさ故に追い詰められて犯罪に陥るとし、その責任を「社会」が分担すべきと主張している点、第3に、貧困に対する方策として救貧組織・救貧法に言及している点、第4に、監獄を出所した後に「良民的生計」を営み、再犯しないようにするのは「社会公共の責務」と述べている点である。

第1の「社会進化の定則」と「生存競争」という社会観については、有機体思想における加藤の優勝劣敗や自然淘汰という議論の影響を受けていると考えられる。第2の「賢愚貧富の懸隔」による犯罪発生という考えは、「賢愚」について加藤による優勝劣敗思想から、「貧富」は安部の「貧富懸隔」という社会思想からの影響が考えられる。第3の救貧組織・救貧法の提示については、社会組織自体を改めるべきだと述べた安部と異なり、また当時の議会における救貧に関する法案の趣旨とも異なる。そこに小河の思想の独自性の一端が垣間見えると考えられる。第4の「社会公共の責務」について、この「社会公共」という思想は、いわゆる公でも私でもない中間領域を想定していたのではないかと考えられる。このように推量するならば、加藤弘之が指摘した「上等平民」という思想と一部重なるが、加藤の場合、貧困者を「上等平民」と対立する存在と捉えている点で大きく異なる。以上のように小河の思想は、当初有機体思想を基盤としていたが、『監獄学』を著すなかで、安部の思想に関心をもち、これらの思想をつなぐものとして「社会公共」という思想が創出されたと考えられる。

安部磯雄（1895）「社会問題と慈善事業」『六合雑誌』172号

加藤弘之（1883）『人権新説』（＝2007、秋山ひさ編・解説「国体新論；人権新説 / 加藤弘之著。フェノロサの社会学講義 / E. F. Fenollosa」『近代日本社会学史叢書 近代日本社会学史叢書編集委員会編 第1期 草創期・生成期（明治初年～30年代）；第4巻』）

森田康夫（1966）「第一章 イギリス自由主義の流入」住谷悦治・山口光朔・小山仁示・浅田光輝・小山弘健編『講座日本思想史 明治社会思想の形成』

室田保夫（2011）「近代日本の社会事業雑誌—『教誨叢書』—」関西学院大学人権研究 15号

小河滋次郎（1894）『監獄学』警察監獄学会（＝1989、小野坂弘監修・解説『小河滋次郎監獄学集成』1・2巻 五山堂書店）

山口光朔・小山仁示（1966）「総論」住谷悦治・山口光朔・小山仁示・浅田光輝・小山弘健編『講座日本思想史 明治社会思想の形成』